

# 岡崎生まれの天才 <sup>かいた</sup>村山槐多と<sup>かなえ</sup>山本鼎

岡崎市美術館

没後100年経った今でも、文学史、美術史に高い評価を持ち続ける稀有なる天才村山槐多。約10年前に岡崎生れであることが分かったことを機に、当市の大きな文化財産として岡崎市美術館では、村山槐多を顕彰紹介する展示を続けています。

## 村山槐多と山本鼎

激動の大正時代、彗星のごとく現れ、熱い輝きを放って消えていった詩人画家、**村山槐多**。彼は絵画と文芸に鋭い感性を発揮しました。しかし極度な貧困と失恋、制作上の苦しみなどから放浪と退廃の生活を送り、激しくも短い22年の生涯を閉じました。



**高村光太郎**は「火だるま槐多」と呼んで、その早すぎる死を惜しみました。

村山の詩を読んだ**芥川龍之介**は「作者の心には、直ちに我等を動かすべき芸術の土の尊さがある」と賞賛し、**与謝野晶子**は「槐多さんの芸術は偉大なる驚異です」と感嘆しました。絵画の分野では**横山大観**が、無名だった村山18歳の水彩画を自身で買い上げています。没後100年を経た現在も、詩、絵画ともに高く評価されています。

いとこ（両母が岡崎市花崗町生まれの姉妹）の画家**山本鼎**は、創作版画の創始者であり巨匠。

村山の並外れた才能を見出し、画家になる援助を続けましたが、100年前のスペイン風邪のパンデミックによって村山を失い絶望、それを機に当時の模写しか認めない美術教育を変革し、子供たちの才能を伸ばすべく「自由画教育」を全国に普及させた功績は大きい。

日本近代美術史に重要な位置づけがなされる二人の芸術家の、深い絆で結ばれたその生涯を岡崎市のコレクションを中心にご覧いただきます。



今回は特別にガラスケースの中に貴重な槐多の油彩が毎月一点ずつ展示されます。